

神父セルギイ（トルストイ）

十九世紀中葉の露都ペテルスブルグに、頗る優秀で美貌の青年近衛士官がゐた。彼、カサートスキイ公爵は、何事にも第一位たんとする強烈な意欲の持主で、士官學校でも近衛聯隊でも「完全無缺な軍人」たるべく絶えず努力を怠らず、皇帝の覺えも目出度い立派な士官となつた。が、それでも彼は満足せず、社交界でも第一位たんとして、美人の譽れほま高い女官の心を射止めて結婚の約束を交すが、彼女が皇帝の愛人だつた過去を知るや、激しい怒りと絶望に驅られ、救ひを信仰に求めて修道院に逃れ去る。

修道院でも彼は「キリスト教の美德のすべて」を達成せん事を冀こひねがひ、「完全無缺な修道僧」たらんとして一心に努力した末、俗世への執著心も何とか乗り越え、三年後、剃髮ていはつして修道僧となり、セルギイの名を與へられる。だが、やがて疑惑や肉欲に苦しめられる様になると、今度は山中の修道院に引籠り、洞窟の中で隱者の生活を送りつつ、六年間、厳しい修行を続ける

が、霧雨の降る或る寒い晩、一人の美女が密かに洞窟を訪れた。飽食の毎日にうんざりしてゐる金持の出戻り女だつたが、美貌の修道僧の評判を聞きつけて、誘惑して憂き晴らしをしようと思つたのだ。セルギイは危ふく誘惑に屈しさうになるが、斧で己が人差指を切斷し、辛うじて己れを制する。女は恥入り悔恨に苦しみ尼僧となるが、この出来事は評判となつて、セルギイの名聲は高まる。

隱者となつて八年目、セルギイには病氣を癒す奇跡の力があるとの評判が擴がり、多くの人々が彼を訪ねて來る様になる。セルギイは聖者さながらに崇められるが、人々との應對にひどく疲勞を覺えるし、時には逃出したくさへなる一方、「賞讚の言葉にとりまかれる」のを心の底では「嬉し」く思ふ。「うん、聖者はかうするものだ」と思つたり、自分自身に「感動」を覺えたりもする。だが、さういふ自分は所詮「虚榮心」の虜とりこでしかないと、内心、思はざるを得ない。それどころか、人々が捧げてくれる愛に「いい氣持になつて」、實は「人々に對する愛」を持合はせず、「謙讓」でも「清淨」でもない己れに忸怩ちくぢたらざるを得ない。

そんな或日、セルギイは訪ねて來た肉感的な娘の身體について手を出して了ひ、己れに絶望して修道院を飛出し、眞の信仰の生活を求めて放浪した學句、浮浪者としてシベリア送りになつ

てからも、自己愛の爲ではない、只管^{ひたすら}他の爲の生き方を追ひ求める事になるのだが、さういふセルギイに己が理想を託した作者トルストイの思ひはさて置き、寧ろ私が打たれるのは、己れの自我の眞實に飽迄も正直たらんとして懊惱^{あうなう}するトルストイの姿である。

ジョージ・オーウェルは「神父セルギイ」の如き作品を物したトルストイについて、「彼は聖者たるべく必死に努力した」男だが、「聖者と只の人間とを別つのは本質の相違であつて、程度のそれではない事を知らねばならぬ」と書いた。いかにも、人間には努力してなれるものとなれぬものがある。けれども、トルストイは斷じてそれを認めなかつた。彼は聖者たるべく本氣で努力したのである。しかし、と云ふよりも、正にそれ故にこそ、聖者たり得ぬ、肉欲や自己愛の奴隸でしかない己が正體を自らに欺く事が出来なかつた。「神父セルギイ」は、眞摯な理想主義と熾烈な現實認識とを包攝^{ほうせつ}し得る、即ち漱石の云ふ、「兩極の人生觀を同時に把握」し得る「頭腦の容量の大きい」作家ならではの作品に他ならない。

無論、「戦争と平和」もさうであつて、熱心な平和主義者だつたトルストイが或る作中人物にかう語らせてゐるのである。「人間の血管から血液を全部抜き去つて、代りに血管を水で一杯にするがいい。さうすれば此の世から戦争は無くなるだらう」。